

エッセイ

たかが川柳されど川柳 (三)

上野 一彦

ソウタ君の活躍

地雷の除去などに使用する軍用ロボットの開発メーカー、米国のアイロボット社が「ルンバ」なるお掃除ロボットをだいぶ前に発売した。購入した人々の話を聞くと、評判はすこぶるよろしい。そこでわが家でも、掃除が完了すると自ら充電コーナーに帰還するタイプのものを、少々値は張ったが家内に相談せず購入した。

一般の掃除機同様、TVを視聴しながら運転できるほど

と木曜日、家の者が出かけた時刻に勝手に作動し、帰宅すると結構なゴミを抱えて、何事もなかったように鎮座します。サボってないことは吸い込んだゴミの量で明らかなのだが、それでもちゃんと動き出すかどうか、出かける時刻を遅らせ、そつと柱の陰から見守ることもある。ここで一句。

『ルンバON 猫と夫が後を追っ』

こつした商品名の使用は、社会通念としてどの程度一般化しているかによるが、ギリギリである。『ルンバ』なぞ、私は知らない」となれば、その時点でドボンである。ダンスのルンバと勘違いし、「面白い家庭の情景」などの評は誠に片腹痛い。

それはそうと、このルンバ、実に健気な働き者である。騒音はまぎ散らすものの、文句ひとつ言わず、黙々と自分の役割を果たす。あまりの律義さ、素直さに、可愛さ余り早々に名前を付け、家族の一員に加えた。命名は「掃太(ソウタ)」である。

「今日はソウタ君が活躍する日だからよろしくね」と家内に告げる。「なんて無口で働き者なんだろっ」と当てこすり気味にほめ過ぎたせいか、家内のソウタに対する態度はいささか冷たく、まるで働きものの、しかも美人の家

静かではない。ルンバは自動ロボットなので、誰もいないときに働いてもらえばよい。週に二回、家人の留守の時刻に作動するようなんとか設定した。最近の電子機器は高齢者にとつてどうも扱いにくい。こちら自身が周りから扱いにくくなると同時に、機器のほうからも敬遠されるようである。タイマーのセットひとつにしても決して容易ではない。わが家のビデオ装置など、無駄な録画を何度か繰り返した後、今や再生専用でしか使わない、いや使えない。

運転音もさることながら、家具にぶつかった時の衝撃音も多少ある(この話、家内には絶対内緒である)。月曜日

政婦さんがわが家に派遣されたなら、きつとこつなるであろうかと想像するに難くない嫉妬の空気を感ずる。相手はロボット、それも円盤状の男の子なのです。

だからこそというわけでもないが、私のソウタ扇房はますます高じる。何回かに一回、部屋の片付けが悪いと、携帯電話の充電コードとか、寝間着のヒモとか、ぬぎすてたままのストッキングを巻き込んで悶絶して家路に帰り着けないでいる。また、狭いマンションなのに隣の部屋に入り込み、器用にドアを押し開け、帰還かなわず部屋の片隅で腹ペコのまま気絶していることもある。だからちゃんと片付けといて頼んだのに……。

先日、真夜中に突然働き出し、家中びっくりして目を覚ますという事件が起きた。一歳の孫が遊びに来ていて、タイマーをいろいろ触りまくったせいらしい。それでもソウタの不始末は私の不始末、こっぴどく叱られた。「君は悪くないんだよ、ぼくだけは君をちゃんと理解しているからね」とそつとソウタのタイマーをセットし直しながらなぐさめ助ました。

こつして留守番役の多いぼくとソウタはますます固い絆で結ばれつつある。そのうち、掃除の感想をレポートする装置をつけることをメーカーに提案したい。例えば、

「もつと衣類の始末をちゃんとしておいてください。」とか、「部屋の整理整頓が下手なようです」とか・・・でも、それが実現しようものなら、ソウタとぼくは家の外に放り出され、締め出されることにきつとなることでしょう。

ぼくのフランス旅行

昨春秋より、娘夫婦が婿さんの仕事の関係でフランスに居住している。まだ一歳にならない孫の顔を見るという名目で、暮れから正月、パリ郊外のイベットという鄙びた町のペンションで一週間過ごした。

パリまでは小一時間、おのぼりさんよろしく、芸術の都のお決まりのコース、ルーブル、オルセー、オランジュリー美術館を日々堪能し、昼のシャンゼリゼのみならず、夜のイルミネーションのシャンゼリゼもぶらつき、四〇年ぶりのエッフェル塔、凱旋門はもちろん、クリニヤンクルの蚤の市にも出かけた。

そうした冬のパリでもっとも心に残ったのは、モンパルナス墓地で、かの実存主義を世に広め、「知の巨人」と

して知られるジャン・ポール・サルトル(一九〇五―一九八〇)と「第二の性」の著者シモーヌ・ド・ボーヴォワール(一九〇八―一九八六)の墓であった。

日本でも、谷中、青山、多摩と八カマイラーの友人と散策を積んできた私は、二人の墓に詣でるべく、メトロ「エドガー・キネ」で下車した。モンパルナス墓地には「女の一生」の作家モーパッサン、ジャコメッティと共に私の大好きな彫刻家ザッキン、ユダヤ人ゆえに迫害された軍人ドレフユース(中学の英語の時間に、A先生から聞かされた「ドレフユース事件」は未だに悪魔島の名と共に記憶にある)など多くの有名人が眠る。

今日、私が見たいのは世界的に有名な哲学者カッパルであり、契約結婚の先駆者でもあるサルトルとその愛人(この表現はあまりふさわしくない)、いや生涯のパートナーであったボーヴォワール女史、お二人の墓である。入り口で地図がもらえると聞いてきたが、守衛にサルトルの名を怪しげな発音で尋ねれば「すぐわかるよ」の仕草。日本の有名人の墓のようにボランティアの案内人もいなければ、案内板があるわけでもない。それらしき場所の墓誌を一つ一つ探していると、ありました、ありました。

パリは一月、いや一年いても、その季節、季節で表情を変え、飽きることはない街だろう。短い滞在だが、パリだけではと、おのぼりさんはおのぼりさんらしく、

墓の上にはさりげなく一輪のけしの花とバラの花、そして訪れた人がそつと置いたいくつかの小石。それが自然で二人の愛にふさわしい風情を醸し出している。「至上の愛ここにあり」しばしたらずみ、同じ場所に眠る二人の魂の交流を感じつつその場を後にした。

私の夢は、茶道具の水差しを骨壺にし、家内と入る事である。先日、備前で格好のものを手に入れ、家内の了解も得た。サルトルとボーヴォワールにあやかりたいわけ、この墓参りは感動の一瞬であった。



サルトルとボーヴォワールの墓



港町 オンフルール



夕暮れと飛行機雲

確かに耳も遠くなったが、聞こえないほうがよさそうなシチュエーションを感じ取る鋭敏さは増してきており、聞こえぬ振りも二度三度、その上の工夫が三度四度。「またとばけて！」とお小言が・・・聞こえぬ振りも五度六度かな。

題詠「結」

バスでモンサンミシエルまで足をのばした。途中、昼食をとるために寄ったさびれた港町オンフルは光と水にあふれていた。

セーヌ川の河口に有るノルマンディー地方のこの古い港町は、ブータン、モネなど、印象派の画家たちからも愛され、多くの絵が残されているという。緯度が高いせいか空も高く、雲の形状にも味がある。空気は澄みきつており、下手な写真も一味違う。港に浮かぶ漁船は貝を獲る船らしいが、まさに印象派格好の舞台であることを彷彿とさせる。

にわか旅人の感傷もあつて、『こんなところに住んでみたい』などという陳腐なセリフがつい脳裏をよぎる。せめて「生まれ変わるならこの港のカモメがいいな」とつぶやくと、「あら、六義園の池のカメじゃなかったの」と、落差のあるご指摘。

「ふらんすに行きたしと思へどもふらんすはあまりに遠し」朔太郎のあの時代の情緒は、現代日本人には遠い想念となつてしまったことを実感した。

『地球は狭し見上げる空は広し』

パリの街の上、雲は流れる。そんな情景をご紹介しよう。



凱旋門屋上からのパリ

たかが川柳 されど川柳 (平成二六年上半期)

一月

友が来てぼっかり小春日和です

増税やら、医療介護費の負担増やら、なにかと厳しいご時世。「友、遠方より来る。また楽しからずや」ではないが、散策や語らいの友人は誠にありがたい。そんな日、そんな時間、そこだけが小春日和の別世界。そんな情景を読みました。

チラリ見えありがたさ増す富士の山

高尾山に登った時、雲間からチラリと姿を現した富士山がまぶしかった。何でもチラリのほうがありがたいものです、なんて。新春早々ちよっといやらしい感じで恐縮。

まあいいか聞こえぬ振りも三度四度

確かに耳も遠くなったが、聞こえないほうがよさそうなシチュエーションを感じ取る鋭敏さは増してきており、聞こえぬ振りも二度三度、その上の工夫が三度四度。「またとばけて！」とお小言が・・・聞こえぬ振りも五度六度かな。

題詠「結」

島田結い契り結んで縛られる

言葉遊びと叱られそつだが。結つば、結ぶにつながり、結ぶは縛るにつながるとすれば、それは人生そのもの。文金高島田を島田だけで略してよいものかどうか不安を感じつつ。

神様もたまに間違っ縁結び

神様にもミスがあるということ。とは言いながら、自分の選球眼の悪さ、忍耐力の弱さをすべて神様のせいに行っているわけです。人間のわがままに付き合う神様のほうこそ大変ですね。

銀杏結い禪締める異邦人

今や三横綱全員がモンゴル出身。その雄姿、日本人よりも日本人らしい横綱ではあるにしても、相撲は国技となると、いささか情けない気もしないわけではない。

二月

恋心義理にくるんでそつと出す (佳作)

バレンタインの日に恋人にチョココレートを贈る習慣は日本のチョコレート会社の戦略だったそうだが。職場では義理チョコの横行。でもそんな義理チョコめかして、

薄っすら恋心を伝えるなんて言う妄想。こんなかわいい部下をもって働けたら幸せでしょうね。

理屈より気合でいつも妻の勝ち (佳作)

つまらないサラ川風といわれそうだが。世の中のロジカルな運びを大切にしている御仁でも家庭は別。でもそれが分かっただけでも家内平穩、大人なんです。でもカミさんだけでなく女って……。

浅き夢通販馬券宝くじ

通販もある種の現実逃避かな。馬券や宝くじは結果が出るまでのお楽しみ。つまり現実には目が覚めるまでが楽しいのです。ということは通販オタクにも当てはまるのかな。

題詠「食べる」

恋するも食べるも寝るもみな力

どこでもすぐに寝られる人を見ると、歳をとってからは睡眠力というものを感ずる。食事にしても然り。きつと恋愛力なんてものもありそうな気がして一句。

食べ放題欲と美容の板挟み

上句「バイキング」とやったのですが。五〇歩一〇〇歩。食べ放題、飲み放題は、若い頃はうれしかったが、

今は元とってないなーの実感が先に立つ。それゆえ、ついつい食べ過ぎてしまつ自己統制力の無さ。

飽食と飢餓が同居のわが地球

かたや無駄食いと飽食。ラーメン何十杯も食う奴は適者生存から言えば滅びの人種。かたや飢餓と飢えに苦しみ、栄養失調の子どもたちもいる地球。人類がかしい生物ならばこの矛盾何とかならないの。

二月 句会 (国分寺 殿ヶ谷公園紅葉亭にて)

われら川柳同人「多年草」の主催者岡部晃彦氏の師匠、つまりわれわれの師匠の師匠にあたる岡部達昭氏を国分寺殿ヶ谷公園紅葉亭にお招きして句会を催した。雑詠は、あらかじめ各自二句達昭氏にお送りし、当日選んでいた。題詠は達昭氏も交えての即興の作句による互選という趣向であった。

不眠症永眠までのひと騒ぎ (佳作)

夜中に一度でも小用に起きる習慣あれば「不眠症」とのこと。それが数度となれば真正の不眠症。気にするとなお眠りは浅くなる。しかし、やがては圧倒的な永眠が控えており、不眠症など生きている証みたいなもの。

題詠「香り」

振り向けば同じ香りの別の女 (金賞)
即興のお題は「香り」
エレベータなどで昔馴染んだ香水の匂い。あつあの人だと振り向けば、そこには別の人が。なんていう妄想から的一句。達昭氏を含め皆さんからも票をいただき金メダルの光栄に浴した。

三月

路地裏のちいさな庭に春が来た

桜は一斉に咲き、はじめてそこに桜の木があったことに気づく。春はどんな小さな庭にも等しく訪れる。「ペランダのプランターにも春届く」とどっちがよかったかなと思いつつ、川柳味は薄いが春を待つ気持ちを一掃一杯表してみた。

探してたりモコンなぜか冷蔵庫

最近、年がら年中何か探し物をしている。今日もまた、さつきまで手元にあったTVのリモコンが見つからない。家中捜し、最後にまさかと思って冷蔵庫を開けると、不思議にもそこで静かに眠っていた。我ながらあきれやら情けないやら。

終の句の結びはやはりありがとう (銀賞)

何を読んでも、どう読んでも、やっぱり結びはあ・り・が・と・う。辞世句なんて早いという気もするが作っておいてわるいことはない。ただただ感謝である。

題詠「環」

表裏みせぬあなたはメビウスね (金賞)

メビウスの環、不思議ですね。表がいつの間にか裏に単純で、割と分かりやすい自分に比べ、そんな人も存在しそ。環というお題に、ふと思いついたのがメビウスの環。環のなかで今日も私は走ってる

籠のなかの二十日鼠 走り続けることが仕事なのかな。ひとまた、その日その日を、繰り返し生きている。「二十日鼠と人間」スタインベックみたいだが、それが日常なんです。ね。

環境を壊す人間返り討ち

悠久の時の営みを 人間は瞬間的に壊してしまう。その愚かさを文明と呼ぶ。自然を破壊し、自然に報復される結局は、文明といいつつも自業自得の所業、まさに返り討ちにふさわしいのではないか。

四月

制服のやんちゃ坊主の様変わり

思いを口にしくなくても、仄聞とか配慮のあるのが日本の美德だったのに。声高に叫ぶ人が増えるとともに、声なき声は勝手に利用される。ご時世。沈黙は金は為政者からの讃辞、それこそ惨事につながる。

名声も棺桶までのおつきあい

浮世の毀誉褒貶。「歳とると勲章欲しがる馬鹿もいる」ご時世。名声なんていうものも所詮はかないものだから、つことを何とか句にしたくて。

五月

ゴーグルにマスクもほしい鯉のぼり (銅賞)

花粉症、空気汚染、文明の進歩は人間の生活環境を大きく変化させている。薫風のなか、悠々と大空を泳ぐ鯉でさえ、この汚染に息も絶え絶えといった句想からのゴーグルとマスク着用。

枯れ過ぎて焼けばつぐくに火はつかず

すっかり安全パイ。昔はこうじゃなかったと思いつつ、身体が利かなけりゃ好々爺への道をひた走る。同窓会も敬老会。まあそれでいいのかもしれない。実は本番で焼けばつぐきを松ぼっくりとミスしました。お粗末。

呆けたのかあのうなずきと生返事

四月 入学式 晴れ着の親子 大きなカバンが歩いている。毎年の風物詩ですが、やや大きめの制服を着たあのやんちゃ坊主が今日はなぜか凛々しい。そんなほほえましい情景を一句。

増税の寄りをうつちやるママの腕 (佳作)

八% それだけじゃない。あれもこれも。気がつくとも貨幣が軽くなっている。福祉など掛け声ばかり。高齢者にとつての厳しい現実。なんとかこの閉塞感を吹き飛ばせないかとの思い。

猫の手のペピーシッター鬼の手に (銀メダル)

女性の社会進出の増大に伴い、追いつかぬ保育行政の貧困さが待機児童やら非認可の施設やペピーシッターを生んでいる。ママにとっては猫の子も借りたい状況。なかには質の悪い輩も存在。虐待などはまさに鬼の所業。

題詠「声」

つぶやきが付け木となつて炎上す (佳作)

ツイッター スカイプ ライン コミュニケーションの形態がおおきく変化してきている。不特定多数との発信も炎上はそうしたなかでの一現象。つぶやきが炎上するならばつぶやきは燃料棒。ちよつと大げさなので付け木に。

都合よく声なき声は利用され (佳作)

だんだん耳も聞こえ難く、理解も半可通。でも状況やらなんとなく返事をしている。相手にもそれを感じるとき、あれ・これ・それで通用するコミュニケーションにも寛容になります。

題詠「捨てる」

捨てるより別れ上手は捨てられる (佳作)

わかる人にはわかりますね。捨てれば心に傷が残ります。でも捨てられるのは、当初辛くても、時間が見事に解決していきます。必ずしも自分のことではありませんが、モテモテ男を見ていて、ついこの句が浮かびました。が女性からの票はいただけません。

すべて捨て生まれたままでグッド・バイ (佳作)

結局はそういうこと。とは言いながら最後の最後まで執着はわが心を去りません。執着は終着までのエネルギーというわけです。太宰風にグッド・バイとつぶやく私。

執着を捨てたらあなた死んでます

グッド・バイの句はきれいすぎ。本音は生きて、生きて、生き抜くのです。まさに執着は終着までのエネルギーそのものなのです。こつちの方が人間臭いですね。

六月

おいしんぼ思わぬとこで食あたり(和) (佳作)

いろいろな知識を教えてもらった「美味しんぼ」、放射能の影響をめぐっての論争、休載。作者のまじめな取り組み姿勢が理解されなかつたんですね。それだけ現地の方々はピリピリしている。「そんな影響は聞いてない」といってる現地の医者言葉に、経験主義+楽観主義かななんて感じて。

若者は歩きスマホに身を任せ

歩きスマホは現代の風物。そんなに何もかも身を任せてもいいのかと心配になる。道路の穴ほこや電柱にご用心との老婆心ならぬ老爺心。

婆ちゃんの生きがいなのよ医者通い (佳作)

こちとらも高齢者。混んでるクリニックもレストランも旅の車中も、大方ご婦人連。しかもみなさん元氣そう。女性は太陽である、ということは男性は月なのかな。遠慮しながらお邪魔させていただきます。

題詠「歌」

サビだけのパッチワークの歌暦 カラオケのいいところ

は歌詞を覚えてなくてもいいところ。恐ろしい勢いでメモリースパンが縮小中。好きな歌もサビの部分だけのパッチワーク。それでもまだましな方も。

この歌はあの想い出の菜です (佳作)

好きな歌には必ず自分の歴史がからみます。あの歌を聞くときの頃の思い出が蘇ります。胸が少し痛くなつて、そつと隣りの妻を見る。ああ俺も若かつたな。

晃彦師匠から額縁級とのお褒め。

諦めの悪い歌詞ほど演歌受け (佳作)

演歌の歌詞はどうしてあんなに未練がましいのだろう。好きなのに別れたとか、逢いたいけれど我慢するとか、歌には悲恋がつきもの。めんどくさい奴だなーと思うときもある。

(了)